

ダンス授業における動きの展開過程の事例的研究 —A中学校の事例から—

鈴木 麻予

A case study of the development process of the movement in the dance class —A case of A-Junior High School—

Mayo Suzuki

I 緒言

平成24年度から全面実施となる中学校学習指導要領は、「多くの領域の学習を十分にさせた上で、その学習体験をもとに自らがさらに探求したい運動を選択できるようにすることを重視し、『武道』、『ダンス』を含むすべての領域を第1学年、第2学年の2年間で履修すること」を明記した¹⁾。しかし、これまでの現状について、中村は「ダンスを全く実施しない学校が20%近くに及び、女子の履修率までもが低下していた」と述べている²⁾。このように学校現場では、ダンス授業を取り扱うことを避ける学校が多いのである。

では、なぜ、ダンス授業が避けられてしまうのだろうか。それは、多くの教師や生徒がダンスのことを知らないからではないか。特に創作ダンスにおいては、教師も生徒もどのような授業で、どのように指導したらよいかわからない。

このような問題を解決し、生徒がそれぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け生涯にわたって運動に親しむことができるようにする為には、教師がダンスについて知る必要があると考える³⁾。

ダンスにおいては、生徒の自由な発想や多様な動きを認め、自己表現力を高めることが大切で、そのための技能は、表現をするための動きを豊富に知ることではないかと考える。

そこで、創作ダンスにおける動きを生徒たちがどのように広げていくかを知り、動きの展開過程

を明らかにすることを目的として研究を行った。

II 研究方法

1. 調査対象:A中学校1年生 21名(男子10名, 女子11名)
2. 調査期間:平成23年11月8日～12月1日
3. 調査方法

8時間完了の創作ダンス授業行い、各時間のVTR撮影を行った。また、ルドルフ・ラバンが述べている「動きの4つの要素」と松本千代栄が述べている「動きをかえる4つの要因」について概観し、4つ視点で授業中に見られた生徒の動きを分析した。4つの視点とは、(1)時間(テンポとリズム)、(2)空間(身体の形態)、(3)力(エネルギー)、(4)流れ(連続する動きの流れ)である⁴⁾⁵⁾。

III 結果と考察

2時間目では、最初にテーマを与えたとき、生徒たちは動きを止めて、周りを見て教師や友達の動きを模倣していた。また、教師の指導で動きを変えていると考えられる生徒も多く見られた。「花が咲く」というテーマで、生徒(赤8)は「咲いている花が大きく成長する過程」の表現から、「つぼみが成長して花が咲く過程」の表現というように動きに流れを作ることによって表現を変化させた。このイメージは、つぼみや花という典型的な形態をそのまま動きにしていると考えられる。また、この時間では、1つの視点を強調していると考えられる動きが多く見られた。

3時間目は、紙を落とさないような動きをしなければならなかったため、「回転する」という動きが多く見られた。まず、動きをしてみることで、イメージを持つことができるようになったと考えられる。例えば、生徒（赤8）は、「回転する」という動きの空間（身体の形態）を強調することで「バレエ」というイメージを表現したと考えられる。また、生徒（青10）は、空間（身体の形態）と時間（テンポとリズム）を強調したり、変化させて動くことことで、「メリーゴーランド」というイメージを表現したと考えられる。

この時間では、とりあえず紙を持って動いてみることで、動きとイメージを連合させることができたと考えます。そのイメージで、4つの視点をそれぞれ強調することで表現していると考えられます。

4時間目は、「殴る」や「蹴る」といった戦いに関連する動作の空間（身体の形態）や時間（テンポやリズム）を変化させることで、「力強さ」や「やっつけてやる」といった気持ちを表現していると解釈できる動きが多く見られた。また、生徒（緑5）と（青9）は、「ドラマで見られるような不良が頭をつかんで床に叩きつける様子」というイメージを4つの視点を複合させて強調することで表現していると考えられる。

この時間では、動きにまとまりができるようになってきたと考えられる。また、1つの表現の中に4つの視点が複合されて強調される様子が見られるようになった。

5時間目は、「動く一止まる」という力（エネルギー）の変化を意識させ、2人の「追うー追われる」という関係を提示した。この関係性から、生徒（緑8）は「おにごっこ」というイメージを持って、「途中で止まって周りを見回す様子」を力（エネルギー）や時間（テンポやリズム）を変化させて表現していると考えられる。この表現は、イメージの典型的な部分を表現するのではなく、代表する1つの場面を捉えて表現していると解釈した。

また、生徒（黄4）は、「新米を引き連れるベテラン刑事」というイメージを持ち、「敵の攻撃をかわしながら進んでいく警察官」や「敵の気配を確認しながら慎重に追跡をする警察官」を表現

していると解釈できる動きをしていた。この動きは、4つの視点を複合させ強調することで、動きにまとまりができ、1つのストーリーを表現していると考えられる。

6時間目は、あり得ない物になりきり、あり得ない感覚をどうやって表現するかというテーマで行った。新聞紙になりきり、感じたままに動く生徒が多く見られた。4つの視点を複合させ強調する動きが見られるようになった。

7時間目は、授業の中で力（エネルギー）、空間（身体の形態）、時間（テンポやリズム）を意識させて動いくことで、「ミュージカルの練習」や「いろんなところを見る少年」など、自分がその世界に入り込み、なりきって表現をすることができたと考えられる。

8時間目の創作ダンスでは、テーマからストーリーを話し合って作品を作り、発表会を行った。これまでの学習の成果を使って表現をしていると考えられる動きが多く見られた。イメージやストーリーが伝わる班は、4つの視点で動きを強調させ、班員がストーリーの世界に入り込み、なりきっていると考えられた。逆にイメージやストーリーを全員がしっかりと持てないと、どうして良いのかわからずに動きが止まっていた。

IV 結語

今回の授業における動きの展開過程には、3つの段階があると考えられる。

最初は、模倣することや先生の指示に従い、とりあえず動いてみることで、動きと連合するイメージを探す段階があると考えられる。この段階では、4つの視点の1つを強調して動くことで表現していると捉えることができる。

次に、わかりやすい一般的な動作や行動、物体の典型的な部分をそのまま表現する段階があると考えられる。この段階では、4つの視点の1つを強調して動くことで表現していると捉えることができる。また、その動きがより強調されるようになる考える。

最後にテーマを比喩的に表現したり、テーマの外見上表出されにくい面に着目し、表現者自身が思い描くイメージの中に入り込んだり、イメージ

そのものになりきって表現をするようになると考えられる。これは、自分の思いを自由に表現する段階であると考えられる。この段階では、すべての視点を効果的に複合させて、自由自在に動くことで表現をしていると捉えることができる。

以上、A中学校の授業実践から、3つの段階を経て、動きが展開していく過程が明らかになった。この段階を踏まえて、教師が生徒の動きを捉え、授業内容や指導法を構成することで、よりよいダンスの授業が展開できるようになるのではないかと考える。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省2008：中学校学習指導要領，保健体育編，東山書房，pp8-9
- 2) 中村恭子2012：移行期アンケート調査から見てきたもの，体育科教育，vol.60-2，p18，大修館書店2012
- 3) 文部科学省2008：中学校学習指導要領，保健体育編，東山書房，pp6-7
- 4) ルドルフ・ラバン／神沢一夫（訳）：身体運動の習得，白水社，pp45，46，pp112-148，1985
- 5) 松本千代栄2008：松本千代栄選集3，明治図書，pp19-26

（指導教員 森 勇示）